

人間感情の背理

このコロナ禍かにあつて親しい人々との接触が遮さへぎられ、いつもであれば外に向かつていた気分がすつかり内向へと方位を転じている。気分が内に向かうや、心身の病のことが急に気になり始める。

私は二十年と少し前、還暦を迎えたのを機に、臍はそを固めてそれまで神経質につづけてきた人間ドックや癌検診などをすべてやめ、今にいたる。特に目立った疾患は抱えていない。還暦以前の病気への神経質な対応を継続していたならば、今頃は臓器のすべてに精細な検診を施される羽目になり、しかもその間、着実に老化をつづけてきたのだから、その分だけ精密検査の頻度も増えて、陰々たる精神状態に追い込まれていたのではないか。

歳を重ねてなおパーフェクトな身体など存在しない。されば、神経質に健康を追求し始めるや私どもは強い不安に囚とらわれ、不安が心の中に膠ちりぢり着して老人性の鬱うつになったり、さらには強迫神経症に陥る確率はかなり高いのではないか。

森田療法の創案者の森田正馬まさたけは、「不安常住」が

渡辺利夫わたなべとしお (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇二〇年十一月退任)。二〇一七年六月より現職。

人生の真実だという。「生の欲望」と「死の恐怖」と、その両刃りゅうはの剣の上に身をおいて辛くも平衡を保ちながら歩いていく日常がすなわち人生である。森田は何度もそう繰り返す。コロナ禍の中で森田の文章を読んでいると、その主張の凜れんとした響きに心が洗われるような気持ちにさせられる。

健康への強いこだわりは、結局のところ人々を不安と恐怖に誘いざなつてしまうというのが人間感情の背理なのであろう。不安と恐怖を異物視し、これを排除しようと計はからい、そのためにますます強く不安と恐怖に囚とらわれてしまった人々が神経症者である。神経症者とは、死の恐怖が生なまの欲望を上回り、人間活動の負のエネルギ―が生なまのエネルギ―を圧倒し、不快、不安、恐怖、抑鬱の念を心の中に固着させてしまう、そういう症状のことである。

コロナ禍の中で不安障害、強迫観念などに苦しむ人々が再生産されている。「健康の中に不安があり、不安の中に健康がある」。そう構えることが成熟した人間の死生観だと考えようではないか。